

区民と創る港区の男女平等参画のための情報誌



Disabilities

Gender

VOL.
82

令和6年(2024年)
9月発行

特集：障がいとジェンダー

～当事者研究と障害者就労から考える～

〔当事者研究〕

身体から言葉を立ち上げ、差別的な構造を是正する

〔障害者就労〕

出会うことと対話すること、そこから社会が変わっていくこと

リーブラからのお知らせ

第44回 男女平等参画フェスタ in リーブラ2024を開催

リーブラからのおすすめ図書

令和7年度・助成事業企画募集のご案内



〔当事者研究〕 身体から言葉を立ち上げ、差別的な構造を是正する

【寄稿】綾屋 紗月^{あや や さつき}さん

仲間たちとの共同研究を通して自分が抱えてきた困難を可視化し、あらゆる個人が受け入れられるような社会への変革を目指す「当事者研究」——統合失調症などの精神障害の分野で始まったこの活動は、今日あらゆる分野にまで広がっており、ジェンダー／セクシュアリティの分野も例外ではありません。自閉スペクトラム当事者であり、当事者研究の第一人者である綾屋さんから、「障がいとジェンダー」について、当事者研究の視点からご寄稿いただきました。

解釈的不正義： 既存の言説では表せない経験

私は幼少期から原因不明の心身の不調やできないことを数多く抱えており、「私は価値の低い存在だ」という自己像を内面化していました。それはやがて結婚後の夫婦関係にも影響し、「女性」を見下す夫の発言に対して「何か違うはずだ」とは思っても、それを覆すような収入や学歴も、知識や言葉も、丈夫な身体も持っていないため、言いくるめられ、無力感と共に夫婦の支配-被支配関係が強化されていきました。そしてのちに私が抱えてきた症状は「自閉症」に該当することがわかりました——このように「女性」と「自閉症」という属性によって私の経験を説明することは、多くの人々の理解のしやすさにつながるかもしれません。実際に、こうした属性を自認する仲間たちが産み出してきた言説があったからこそ、私の苦労は確かにあるものとして承認され、生き延びることができました。

しかし私の内側からの視点ですと、どうもこうした語り方だけでは、じっくりこない部分が残ります。なぜなら「男／女」や「自閉症」という既存のカテゴリーは、ある種の経験を承認すると同時に、別の経験を取りこぼしてしま

うような効果を発揮するからです。このように、少数派の経験を表現する言葉が社会の中で流通していない状況を、哲学者のミランダ・フリッカーは「解釈的不正義」と呼んでいます。

私の身体から言葉を立ち上げる： 予測と現実のズレに敏感

そもそも、自閉症の診断基準となっている「コミュニケーション障害」は、個人の「中」にある「特徴」ではなく、多数派向けにデザインされた社会規範やコミュニケーションルールにあてはまる多数派の人々と、あてはまりにくい様々な少数派の人々の「あいだ」に生じる「現象」だと考えられます。多数派との間に生じるさまざまなズレを、マイノリティ性を持った個人のせいにするのを可能にするこの診断基準は、差別構造を温存させる概念だと私には思われます（図1）。

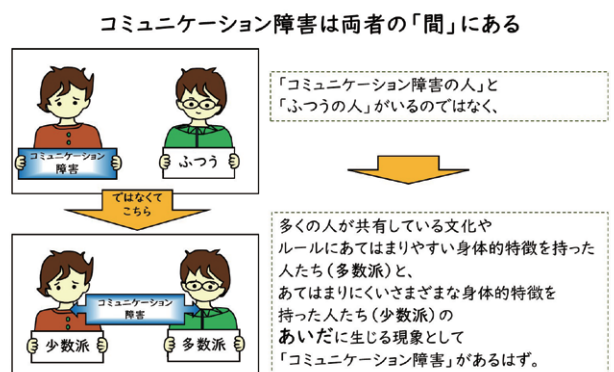


図1 「コミュニケーション障害」を私たちに押しつけないで！

そこで私は、こうした不平等を抱えた既存の
カテゴリーを一度脇に置き、自分の内側で起き
ている現象を表現する言葉を、仲間と共に生
み出して広めることで解釈的不正義を是正する
「当事者研究」という活動に、長年、取り組ん
できました。そして私の経験の多くを、“「予測
誤差」への気づきやすさ”という特徴で説明で
きそうだと思うに至りました。予測誤差とは、
認知科学などの分野で使われている概念で、予
測された感覚と現実の感覚のズレを意味します。
このことは「多くの人よりも世界を解像度高く
とらえているため、違いに気づきやすい」と言
い換えられるかもしれません。

この説明は、私が抱える身体感覚・感情・言
語における他者とのズレ、「器用／不器用」と
いった運動制御における他者とのズレ、そして
ジェンダーの捉え方における他者とのズレを解
釈する際にも役に立つと考えています（図2）。

ジェンダーに関するズレの例を挙げますと、
私が小学生の頃には男児が黒、女児が赤のラン
ドセルを背負うというジェンダー規範があっ
たのですが、私の感覚は「赤より黒のランドセル
のほうが反射する光がはるかに美しい」と、物
質そのものが持つ細かい特徴に着目し、黒い
ランドセルを欲しがりました。また「足腰の冷
えに耐えられない」という強い感覚は、私をス
カートよりもズボンへと向かわせました。この
ように私の予測誤差への敏感さは、譲れない著
しい違いとして感受されやすく、その結果、当
時は今よりも「男らしさ」に分類されていた「黒
いランドセル」や「ズボン」を、たまたま志向
することになりました。そして、このような身
体感覚を通して世界を捉えている私には、いま
だに男／女のたった2つに世の中を切り分けよ
うとする概念そのものが、大雑把に感じられて
ピンときません。



【紫の雑草】



ネジバナ



カラスノエンドウ

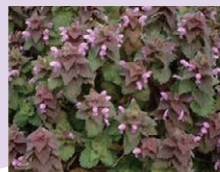
【異なる色々な紫色の花】



イヌダテ



ホトケノザ



ヒメオドリコソウ

周囲の人々が「紫の雑草が
咲いている」という時、綾屋
は「異なる色々な紫色の花
が咲いているように見える
が、私の感覚は合っているの
だろうか」「本当は目の前に
ないのだろうか」と不安にな
り、自分にも世界にも確信が
持てずに過ごすことになる。
植物図鑑を与えられて、確か
にそれらの花々が存在する
ことが分かりホッとする。

綾屋紗月 (2013) . 「当事者研究と自己感」石原孝二
編『当事者研究の研究』医学書院 pp.177-216.

図2 多くの人よりも世界を解像度高くとらえているため、違いに気づきやすい

世界をどれくらいの解像度でカテゴリー化するかには個人差がある。そして日常言語は多数派の解像度にカスタマイズされている。そのため多数派より解像度の高い綾屋の感覚を表現する言語が流通していない（解釈的不正義）。専門用語は日常言語よりも解像度が高い場合があり、綾屋の感覚を表現する言語として役に立った（例：植物図鑑）。

自閉症診断に安易に結びつけられた性差

さらに自閉症研究では、専門家によって安易にジェンダーや生物学的性差と結びつけられて、さまざまに解釈されてきた経緯があるため、事態は複雑です。例えば2004年頃には「自閉症者の脳は男性的な脳が極まった状態であり、ゆえに自閉症の女性は女性同士のコミュニティになじみにくい」「自閉症と男性の脳の共通点として、システム化の能力が高く、共感能力が低いという特徴がある」と解釈する「超男性脳理論」が提唱されました。そのため、いまだに自閉症をステレオタイプな男性性およびエンジニアや理系研究者のイメージと結びつける言説が根深く存在しています。しかし、こうした解釈にはいくつかの弊害があります。1つは男性のパートナーとの関係に悩む女性に、「彼は自閉症だから」と解釈する資源を提供することで、男性側が1人の人間として負うべき責任や、2人の関係の背後にあるジェンダー構造の問題がないことにされ、その代わりとして、自閉症に対する偏見や差別を助長してしまうという点です。また、文化的な男性らしさを反映した診断基準により、女性らしさに適応しようと努力している女性自閉症者の診断が遅れ、精神的不調を来したり、経験を分かち合える仲間と出会う機会を奪われたりする点も問題です。さらに、女性よりも男性のほうが理系に向いているという誤った言説に生物学的な根拠を与えるように見えてしまう、という問題点も挙げられます。

私たちが留意すべきこと

以上述べてきましたように自閉症概念は、社会規範にそぐわない様々な人々を一律に「コミュニケーション障害」とみなし、コミュニティから排除することを可能にしています。しかし、例えば、自閉症概念によって家族というコミュニティの中で生じている問題の原因を、家族内の特定の「個人」の特徴に帰属させることは、問題を抱えた「家族システム」を温存してしまいやすくなります。コミュニケーションのすれ違いが起きたときには、①安易に「コミュニケーション障害」という概念を使わずに、各々の特徴や個人的背景を検討し、それらのすれ違いとして捉えていくこと、②背後にある差別的な構造（ジェンダー構造や、特定のコミュニケーションルールを規範化した自閉症言説など）を是正すること、という2点に少なくとも留意する必要があるでしょう。

寄稿者プロフィール

あやや さつき
綾屋 紗月さん

自閉スペクトラム当事者。東京大学先端科学技術研究センター特任准教授。発達障害当事者を中心とした当事者研究会「おとえもじて」主宰。長年「当事者研究」に取り組み、その歴史・理念・方法について研究している。最近では国際的な自閉症コミュニティとつながり、自閉症者とアカデミアの共同研究のための課題についても検討している。主な著作に、『発達障害当事者研究』（共著、医学書院、2008年）、『つながりの作法』（共著、NHK出版、2010年）、『ソーシャル・マジョリティ研究』（編著、金子書房、2018年）、『当事者研究の誕生』（単著、東京大学出版会、2023年）など。



[障害者就労] 出会うことと対話すること、そこから社会が変わっていくこと

【インタビュー】志村 季世恵さん（一般社団法人 ダイアログ・ジャパン・ソサエティ）

真っ暗闇のなか、アテンド（案内人：視覚障がいのある方）に導かれて白杖や足に伝わる感触、そして周りの音を頼りに歩き回り、様々な体験と気づきを得られるソーシャル・エンターテインメント「ダイアログ・イン・ザ・ダーク（DID）」を知っていますか？ 一般社団法人ダイアログ・ジャパン・ソサエティが DID を常設するダイアログ・ダイバーシティミュージアム「対話の森[®]」（港区・竹芝）では、従業員の 65% が障害者雇用で、障がいの有無・性別に関わらず一人ひとりが自分らしく働ける職場を実現するなど、その取り組みの先進性は今注目されています。同法人における障害者雇用の実践や、これからの多様性のある社会の実現に必要な取り組みについて、代表理事の志村季世恵さんにお伺いしました。

日本のDIDは、ある新聞記事から始まりました

DIDは1988年にドイツで始まり、その後ヨーロッパ各国で大ヒットしました。1993年、オーストリア・ウィーンで開催されたDIDについての新聞記事を、今の私の夫である志村真介が読んで感銘を受け、これを日本でも行うことはできないかと思い、発案者に直談判しました。ここから、私たちの活動が始まったんです。

DIDで障がいのある方たちと一緒に働く中で、あることに気づきました。それは、障がいのある方たちの多くが経済的に自立しづらい環境にいるということ。働いてもお給料は低く、多くの方が障害年金をもらいながら細々と生活をしていて、自分の家を持ったり、自分の税金を自分で納めたりすることがなかなか難しい、といった現状を知ったのです。

障がいの有無も、女性か男性かも、関係ない！

私たちの団体では、障がいの有無に関わらず、お給料に差はありません——もちろん、男女間のお給料にも差はありません。私たちが目指していることは、障がいの有無やジェンダー／セクシュアリティに関わらず、ひとりの人として活躍できる職場です。実のところ、私たちの団体は（障がいの有無に関わらず）女性の社員が多いためか、これまでジェンダー／セクシュアリティを社内の課題として認識してきませんでした。しかし、結果としてジェンダー格差のないお給料のシステムになっていると思います。

お給料について、健常者と同等のものを目指しているのではなく、その人の能力が最適に活かされ

ること、それが結果としてお給料に反映されます。「お給料に差をつけない」、これも私たちの団体が取り組んだ大きな挑戦だったと思います。

スタッフは「かがやく星」なんです

アテンドの方々の働き方はいろいろです。常勤でバリバリ働いている方もいますし、子育てをしながら非常勤で働いている方もいます。「常勤だから偉いんだ、すごいんだ」、「男性だから／女性だからこういう働き方をしなければならない」ではなく、一人ひとりに合ったいろいろな働き方があってよいと思いますし、それで成り立っていく組織を目指しています。だから、アテンドをはじめスタッフの皆さんには自分の働き方について「自分が働きやすいように、我慢しなくていいんだよ」と伝えているんです。一人ひとりの個性や能力、要望などを丁寧に聴きながら人事の配置や昇給などを決めていきます。

なかには、アテンドとして働くうちに自分に自信がついたことで「他の企業で働きたい！」と一念発起、大手企業に転職し人事担当として働いている方もいます。アテンドはもちろん、外に飛び出して挑戦する元スタッフのことも私たちは「かがやく星」として応援しているんです。

スタッフの育成とエンパワメント

私たちの団体は、「ダイアログ・アテンドスクール」というアテンド養成のプログラムを実施していて、発声練習や演劇的なカリキュラム等を取り入れながら、コミュニケーショントレーニングを行っています。また、健常者と一緒に働くことに抵抗を感じている方への心理支援・セラピーを行っています。



アテンド・スタッフのみなさん

ちなみに、スクールに来る人が全員アテンドを目指しているわけではないんです。アテンドになる人もいれば、一般企業に就職する人もいるし、卒業後はいろいろな選択肢があります。また、一般の企業様から、「私たちの社員を教育してほしい」とお願いされることもありますね。

少し話が脱線しますが、障がいのある方の多くは社会と接点が少ないことで、自分に自信を持てず寂しい気持ちを抱くことがあります。だから、私たちのスクールを通してエンパワメントされ、社会に挑戦していく方もいます。

先輩と後輩の垣根を越えて学び合い、助け合う

この5月に、新人アテンドが1人デビューしました。その方は本当にアテンドが上手な方なのですが、新人が入ってくると、ベテランアテンドも良い影響を受けるんですね。先輩から後輩に「どうやったら上手にアテンドできるの?」とか、「あなたがアテンドをしているなかで何を大切にしているの?」と質問し、真摯に学ぶ姿が見られます。一方で、慣れない通勤で大変な新人アテンドに、ベテランアテンドがそばでフォローしながら一緒に通勤する姿も見られます。このように、先輩や後輩という垣根を越えて、相互に学び合い、助け合っているんです。

「だからこそ」から広がる可能性

障害者雇用について悩む企業様も多いと思います。雇用する人の個性や能力をあまり見ず、「この仕事ならできるだろう」と仕事を与えるだけでは、

企業様にとっても、雇用される方にとっても、とても勿体ないことだと思います。

障がいの有無や、ジェンダー／セクシュアリティに関わらず——「障がい者だから」「女性だから」ではなく、「あなただからこそ」できる仕事を、対話（ダイアログ）していくなかで一緒に模索することから、一歩ずつ、丁寧に始めてみませんか。

海外では学校教育のなかでDIDが取り入れられています。DIDを通して自己肯定感が高められ、ダイバーシティの価値が分かる——DIDは孤独を感じやすい日本の子どもにも必要だと思います。

最後に、イソップ寓話の「北風と太陽」のような話をさせてください。私たちの団体は、DIDなどの活動を通して社会課題の解決を目指しています。しかし北風のように強く訴えるだけでは、社会はなかなか変わらないんですね。それなら太陽のようにあたたかく笑いながら活動をしていこうと心掛けています。

出会い、対話していくことから、実際に社会が変わっていきます。その可能性をもっと広げたい。誰もが自分らしく、個性や能力を発揮しながら、それぞれのペースで働ける社会を実現したい。私たちの団体が、そのような対話を生み出す場になればと思い、日々活動しています。

※本記事の写真は、(一社)ダイアログ・ジャパン・ソサエティからご提供いただきました。

話者プロフィール

しむら きよえ
志村 季世恵さん

一般社団法人ダイアログ・ジャパン・ソサエティ代表理事、ダイアログ・イン・ザ・ダーク コンテンツプロデューサー、パースセラピスト

1999年よりダイアログ・イン・ザ・ダークの活動に携わり、発案者アンドレアス・ハイネッケ博士から暗闇の中のコンテンツを世界で唯一作ることを任せられている。活動を通し、多様性への理解と現代社会に対話の必要性を伝えている。パースセラピストとして心にトラブルを抱える人、子どもや育児に苦しみを抱える女性をカウンセリング、クライアントの数は延べ4万人を超える。主な著作に『エールは消えない——いのちをめぐる5つの物語』（婦人学友社、2023年）など。



第44回 男女平等参画フェスタ in リーブラ2024を開催

港区立男女平等参画センター（リーブラ）は1980年に開設され、今年で44年目を迎えました。年に1回開催する男女平等参画フェスタは、登録団体で構成される実行委員会が中心となり話し合いを重ね、活動内容の発表等を通じて、男女平等参画について楽しく学ぶ場を作っています。

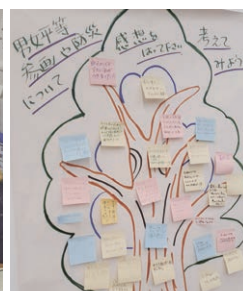
今年は6月28日（金）～30日（日）の3日間開催しました。28日（金）の前夜祭では、エッセイストでタレントの小島慶子さんによる主講演「人生はあもごも生きられる～変化の時代を生きぬく知恵～」を開催しました。29日（土）の開会式では港区長の清家愛氏からご挨拶があり、その後各参加団体ブースを見て回られました。3日間で2,276人の方にご来場いただきました。



[開会式でお話される清家区長]



[お子さん向け企画]



[ジェンダーパネル展の感想]

リーブラで活動する団体の参加は、展示・料理・茶道チーム21団体、ステージ・ステージ企画チーム29団体、お子さん向け/ジェンダーパネル/スタンプラリー企画チーム3団体、講座企画チーム4団体、広報チーム1団体でした。また、23団体に当日の運営をお手伝いいただきました。



[[プラチナ美容塾]の交流コーナー] [「清水軍治さんと童謡楽唄会」の様子]

今年は男女平等参画とともに防災もテーマに、パネルや展示で災害時のジェンダー配慮が促されました。メッセージコーナーには急遽模造紙が追加され、多くのコメントが寄せられていました。

お一人でふらりと、お友達同士で、お子様と一緒に、時にベビーカーを押しながら、ゆったりと催事を楽しむ皆様の様子がありました。手形アートやスタンプラリーをはじめ体験型コーナーも賑わっていました。ステージではお子様から経験豊富な方まで多世代がご活躍になっていました。まさに参加者と来場者が世代をこえて交流し、多様性を受容するフェスタになってきているのではな

いでしょうか。

私自身フェスタに参加し始めて約7年、比較的新しい団体です。本フェスタほど、質実ともに実行委員会が企画運営するものは、他では見たことがありません。歴史ある取り組みながら、新しい風を大切に、実行委員会も経験の少ない方を登用し支える動きがあります。そのような中で委員長を務めたことで、区民の催事を区民が作る本質を学ばせていただいた気がします。

フェスタへの企画運営参加は11月頃に利用団体を対象に募集されています。ご関心をお持ちの方はぜひお問い合わせください。また来年のご来場・ご参加もお待ちしています。



[閉会式での記念撮影]

報告 **成瀬 悠** (第44回 男女平等参画フェスタ in リーブラ2024 実行委員長 / NPOハロハロ 理事長)

おすすめ図書

& 展示ブースの紹介



『向田邦子ベスト・エッセイ』向田和子[編] (ちくま文庫)

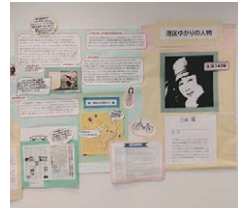
リーブラの図書資料室に所蔵する資料の中から、おすすめの本を紹介します。リーブラの所蔵図書は、港区の図書館カードで借りることができます。ぜひご利用ください。

『向田邦子ベスト・エッセイ』 向田和子[編] (ちくま文庫)

戦後日本を代表する作家・脚本家でエッセイストの向田邦子(1929-1981)。没後40年以上たった今でも、向田の作品は愛され続けています。今回紹介する本は、向田の珠玉のエッセイ集です。

脚本家としてキャリアをスタートさせた向田ですが、何気ない日常や家族について、飾らない、正直な文体で綴ったエッセイも有名です。オススメは、向田の大好き「のり弁」について紹介している「食らわんか」(132-145頁)。また同じシリーズで『向田邦子シナリオ集』もあります。

2024年9月から、リーブラ入口すぐの展示スペースで常設している「港区ゆかりの人物」コーナーにて、向田邦子の特集します。本を借りられる際、ぜひ展示ブースもご覧になっていただければ幸いです。



リーブラ展示スペースの様子 (写真は港区ゆかりのオペラ歌手・三浦環の展示)

お知らせ

令和7(2025)年度・助成事業企画募集のご案内

私たちの暮らす地域、社会には、改善や解決していきたいと感じる悩みや課題があります。リーブラでは、「全ての人が性別等にとらわれず、自分らしく豊かに生きる」ことのできる社会づくりのための企画に助成金を交付し、活動の支援を行っています。皆さんの思いや、アイデアを形にするチャンスとなるこの事業を活用して、男女平等参画の活動をおこなってみませんか。

※詳しくはリーブラ公式ホームページに掲載されている募集要項をご確認ください。(HP→ <https://www.minatolibra.jp/subsidy-proposal/>)



●対象となる主なテーマ

- ・性別、性的指向及び性自認による差別の解消
- ・女性活躍推進・働き方改革
- ・男性にとつての男女平等参画推進
- ・ワーク・ライフ・バランスの理解促進や多様な働き方を選択できる社会づくり
- ・男女平等参画の視点による地域のネットワークづくりや住みやすいまちづくり
- ・配偶者等からの暴力(ドメスティック・バイオレンス)の防止
- ・港区内の男女平等参画の調査、研究、分析 など

●説明会

- ・助成事業の申込を希望・検討される方は、第1回・第2回説明会のいずれかに必ずご参加ください。
【第1回:会場開催】:2024年9月22日(日)午後2時~4時(リーブラ学習室C)
【第2回:オンライン開催】:2024年9月29日(日)午後2時~4時(WEB会議サービス「Zoom」)

●申請期間:2024年10月14日(月・祝)~11月11日(月)

●申請方法:港区立男女平等参画センター(リーブラ)に郵送またはメール(info@minatolibra.jp)にて提出

※申請を検討される方は、必ずリーブラの窓口か、リーブラのホームページからのデータダウンロードなどにより、全ての書類をご確認ください。

●助成事業の3タイプ:より活用しやすくするため、2025年度よりステップの助成金額を改変しました。

タイプ	ホップ	ステップ	ジャンプ
対象	港区にかかわる個人、団体・機関	港区にかかわる個人、団体・機関	港区にかかわる個人、団体・機関 港区内の調査・研究機関(大学も含む)
助成金額(税込・最大)	100,000円	150,000円	300,000円
支払時期	企画実施後	企画実施後	企画実施前
事業規模イメージ	団体を設立したばかりで、事業運営の支援が必要。事業(講座・イベント)を始めたいと考えている。	講座回数、講師人数、対象者数等の規模の拡大。活動の活性化、知名度の向上など、より自立した運営を目指している。	自立した運営を基に、より大規模な事業を考えている。また、男女平等参画に関する調査・研究(研究機関や大学)。

港区立男女平等参画センター リーブラ

〒105-0023 港区芝浦1-16-1 みなとパーク芝浦
Tel:03-3456-4149 Fax:03-3456-1254
▶<https://www.minatolibra.jp/>



講座情報等をメールマガジン「クラブL」で配信しています(月3回)。登録はこちらから →



アクセス

- JR「田町駅」東口(芝浦口)徒歩5分
- 都営地下鉄浅草線・三田線「三田駅」A6出口 徒歩6分
- ちいばす ◆芝ルート・芝浦港南ルート「みなとパーク芝浦」徒歩0分
◆芝浦港南ルート「芝浦一丁目」徒歩4分
- 都営バス(田92・99)「田町駅東口」徒歩6分

港区男女平等参画情報誌「OASIS オアシス」82号 2024年9月発行
発行:港区立男女平等参画センター 指定管理者 株式会社明日葉

